

最終回

コトワザの仕掛け

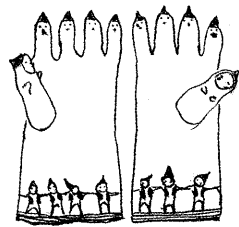
堀内 守

カスガイ

カスガイをごらんになったことがおありでしょうか。
漢字で書くと、「金ヘン」に「送」と書きます。変わった漢字。もちろん、当用漢字にはない。ワープロのフロッピイにも入力されていません。

カスガイは、戸を閉ざす金具でした。カケガネともいいました。建材の合わせ目をつなぎとめるために打ち込む両端の曲がった大釘のこと——まあ、こういったところがカスガイのセツメイです。

そこから転じて、両者（たとえそれが材であれ、人で



あれ)のあいだをつなぎとめるもの、という柔かい意味が生まれました。実物のカスガイは鉄製ですが、転じたカスガイの方は伸縮自在、観念の擬集体です。

ご存知のコトワザ「子は夫婦のカスガイ」などがその代表的なものです。

ことによると、このコトワザも最近ではおかしくなったのかもしれないが、それはともあれ、「カスガイ」の本体も見えなくなったこのごろですから無理もありません。

でも、このコトワザに少々こだわってみたい。なぜなら、このコトワザの歯切れの悪さが気になるからです。人によっては、このコトワザを「歯切れよきコトワザ」とごらんになる。そういう方がおられてもよい。でも、このコトワザは、まったく「諺」ならぬ「言葉」ことわざではないか、ことばのマジックではないかと疑ってみる価値はありそう。だいいち、体言止めで、言い切っていない。ニュアンスをぼかしている。読む方は、それに動詞をくっつけて理解しています。「子は夫婦のカスガイ」に続

けて、「である」だの、「なり」だの。それはみなココロのなかでなされる「言葉」です。ならば、もう少し積極的に、「ではない」だの、「であってほしい」だのを付け加える実験があったっておかしくはないでしょう。

なのに、たいてい「である」を付け加えて解釈している。

ことわざ 言葉の業

やっぱり「言葉の業」なのです。「言の術」といってもいい。

試みに、ココロのなかで生じる場面を映像化してみてください。まず、「カスガイ」というモノを示す。そして、カスガイのはたらきを説明する。そのあと、両親に手をひかれている子どもを映す。

説明がなくとも、この映像に接した人は、ある連想によって、「カスガイ」が「キズナ」に転じていることを見抜きます。いや、見抜けるようにあらかじめセットしてあります。

いささかCM風の風景ですが、「子は夫婦のカスガイ」は、みごとに「である」を消去しており、そのことよって、きわめてCMに近いことを暗示しています。

もし、右の映像をつなげて、ちょっとした説明を加えましょう。とたんに、あの映像は、ある情感を示しはじめます。

さて、この「カスガイ」ですが、実物をごらんにならなくとも、以上で大体の見当はおつきになったと思います。何しろ、実物はいささかドギツク、あまり格好のよいものではありません。むしろ無骨なところが愛嬌があるくらいです。

でも、実物を知らなくとも、このコトワザのイミはどんな見当をつけることができます。大体コトワザなるものは、短かく、簡潔に事態を表現し、相手に反論の余地を与えぬほど歯切れがよくなくてはいけません。そして、このコトワザのように、「である」はこっそりと隠してしまうのが特徴のようです。しかし、完全に隠してしまわない。あるていど見当がつくように仕掛けてあ

る。だから、それを読み解く面白さもあるのです。

「子は夫婦のカスガイ」

もっと省略可能です。

「子はカスガイ」

これでも充分イミが伝わりそう。

読み方を変えてみる。

「コはフーフのカスガイ」

「コはメオトのカスガイ」

「シはフーフのカスガイ」

「ネはメオトのカスガイ」

余分なことと思わないでいただきたい。つまり、このコトワザは、暗々裡に「夫婦」の方に焦点を当てているのです。「夫婦」をターゲット(的)としているといっても、「夫婦」を読者に想定しているといってもかまわない。

「子」は何も主張してはいません。

もうひとつ、「言の葉」を。

この「子」は何歳ぐらいでしょうか。二十歳、三十歳

……などということは想定されていません。どう考えても十歳以下。もっともっと幼ない子——でなくちゃ、ママになりません。

サマになる

こうやってさまざまな面からつついていくと、このコトワザが事実を淡々と表現しているとは思えなくなってきました。

言外のイミが主で、文言上のイミは従になっている。そういう気がしてきます。

『子は夫婦のカスガイ』というじゃないか。だから……』というような、「だから……」に続くセリフ、その場面や状況が問題になってきます。

逆にいえば、今日、「子は夫婦のカスガイ」というコトワザが使われなくなったとしたら、その場面や状況が変わった、ということになるのではないのでしょうか。

このコトワザの言語上の面白味は「夫婦」という字にあります。これを「夫」と「妻」としたら「オット」と

「ツマ」になり、音声上の調和は失われます。「メオト」

は両者の融合状態を示します。今ならば、アツアツの新婚さんのイメージで、「子」の存在する余地はない。すると、「フーフ」と読ませたからには、当然、ある期間が過ぎ、「似た者夫婦」になっているか、それとも時折はイサカイなどをするくらいに慣れ、馴れ、狎れてきていると見なければなりません。このコトワザは、この時期のフーフを対象としていようであります。

つまり、慣れ、馴れ、狎れの日常性を前提にしてはじめて、このコトワザは「そのとおり」とか、「まさか」とか、「そうかしら」とか、さまざまの波紋を呼び起すのです。

サマミロ

こういうアリサマを見ていくと、「サマ」を見ていくことの大切なことが身にしみてわかってきます。「ザマミロ」とは、今日ではののしることに転じてしまいました。それがもとに戻し、「サマミロ」と濁音ははずし

てみればよいでしょう。パリヅウゴン（罵詈雑言）のサマはさっぱりと消え失せ、アリサマを丹念に見ていこうという態度がそこに表明されているようです。そして、同時に、そこには、「一步気をゆるめると『ザマミロ』に転じてしまうかもしれない」というきわどい覚悟も表現されているようです。

さて、「子は夫婦のカスガイ」の「子」の方に移りま
す。先ほど指摘したように、このコトワザにおいては「子」のアリサマはさして重要ではないように見えます。「カスガイ」にたとえられているのがオチですから。

ところが、同じく先ほど試みたように、「子」を發生的に、主体的にとらえ直してみるならば、「子」のイメージはもっと躍動的になっていきます。

このコトワザのイミは一つだ。そしてこう解釈するのが唯一の正しい解釈だ。もし、そう主張するような人がいたら、そのサマは少なからず異様です。むしろ、いろいろに解釈でき、しかもそれぞれがそれなりの妥当性を

もっているサマを見てとることが必要です。

フーフ

もうだいぶ昔のことになりますが、友人の結婚式に出ました。招かれた客のなかで、かなりのおとしの方が祝辞をのべました。そのあいさつが奇妙なことにまだ記憶に残っています。

「えー、フーフというものは、一身体でありまして、そのことは、フーフということばにあらわれているのです。フーフと上から読んでもフーフ、下から読んでもフーフ、左から読んでもフーフ、右から読んでもフーフであります……」

めでたい場面ですから、こういう祝辞が楽しく全体の雰囲気盛りあげてくれました。

しばらくたってから、この祝辞をあらためて考え直してみると、内容はいかにも平凡のように思えました。まるでコトバアソビをしているようにも思えます。しかし、もうしばらくして考え直してみると、「上から、下

から」はわかりますが、「ヨコから」読む段になると、少しおかしく思えました。その方が調子に乗って、つい「左右」を「上下」に対比してしまったからでしょう。

「夫婦」を上から読む。そして、下から読む。それは面白い。しかし、「夫婦」と書いてあるのを左から読んだり、右から読んだりしたら、はたして「フーフ」ということになるのか？

さて、話を先へ進めましょう。

対称ということばをご存知ですね。算数や数学に出てきたあの「対称」です。英語では「シメトリ」。古代ギリシア人たちは、このことばを部分と全体とのあいだの節度、つりあい、調和、みごとな均衡というイミで使っていました。現代でも建築家がほぼこれと同じイミで使っています。ところが、物理学や現代数学では、対象の概念は空間的であることをやめ、一つの集合あるいは実験においてあらわれる一連の変化のなかに、不変の要素が続いて出てくることをさしています。

ともあれ、昔の算数の時間に学んだことを参考にして

みましょう。いくつかのタイプの対称がありました。平移動による対称がありました。回転による対称もありました。

鏡による物体と像の対称、これがいちばんわかりやすい対称の例だと思えます。私たちの顔は左右対称です。身体も。家や家具だって対称のものが多く。それは何をイミするのでしょうか。

安定と平衡です。

上から、下から

日本語は上から下へとタテに書いていくこともできます。左から右へ書いてもよい。以前は右から左へ書いた時代もありました。

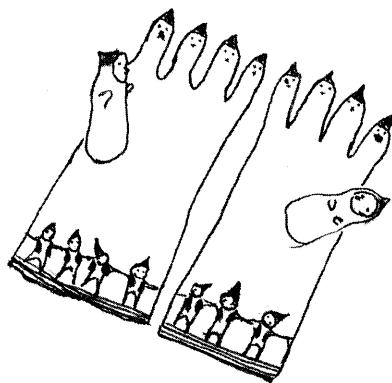
どちらが便利か。ということはいえても、どちらが正しいか、とはいえない。それくらい、書き方は社会の約束にもとづいています。

理論上は「下から上へ」と書いていってもおかしいことはありません。しかし、もしそういう文章に出あった

ら、私たちはきつとふだんのやり方にしたがって、まずは上から読んで、その文がおかしいことに気づく、というのがいちばんありそうなことのように思えます。

おそらく上から読む、という習慣は、重力が落下を強制するという単純な事実から類推されたものでしょう。

幼ない子どもが、「空へ煙が登っていく」という代わりに、「空へ煙が落ちていく」と表現することがありますが、それは単におかしいというだけではなく、私たちの慣れ切った表現の虚を衝くからにはかなりません。



そして、あらためて私たち自身の常識の虚を衝けば、そもそも「空へ煙が登っていく」という、ごくあたりまえの表現も、見かけ上、そう「見える」というだけであって、分子の運動という次元でとらえたら、「登る」とはいえないでしょう。

ともあれ、上と下という単純な分類からスタートして、人類はいくつもの対になった命題を確実に生み出してきました。そして、その結果、二元論の宇宙がちりちりとできあがってしまいました。上と下は、優と劣、精

と粗、精神と物質、高潔と低俗、というような対象的な価値で分けられてしまいました。もともと、対等な対で、対称だったものが、いつのまにか対象になったのです。「上の子」「下の子」「上位の子」「下位の子」等々の分類はまだ初歩的です。

前や後や右左

同様に、前と後の対立は、それ自身の身体的な次元を越えて世界の分割の基準となつて拡がっていきました。前後という対は、未来と過去、早熟と晩熟、進歩と退歩の対立をもたらします。進んだ思想や進歩的な思想、後れた思想や後進国などと申します。

これらも、実際のところは、身体をもとにした前方と後方の根源的なイメージからひき出されたものです。左右も似た構造をもっています。

こういう分類の網のなかに「子」を入れてみましょう。すると、この分類の網はたちどころに、この「子」を上下、前後、左右から評価を下してしまいます。

運・不運

では、それですべてなのでしょううか。

そうではありません。

運と不運、善と悪、吉と凶とを、あの上下や前後左右の分類の網ではとらえられぬ問題にふり当てているのです。

運や不運などといいますと、オミクジだの、占いだの、さまざまな現象が思い出されますが、「当たるか当たらぬか」という二者択一的な興味をもってこれらを見るよりも、運や不運や吉や凶が、人間の心の動きが形成する世界で、人間が不安に動揺し、手さぐりをしていることを象徴していると見るべきでしょう。

人間がみずからの能力を発揮して行なう仕事には予見する能力と首尾よく目的を達成する能力が見てとれます。計画したり、練り直したり、修正したりしていくなかでそれらの力は発揮されていきますが、その過程にも運不運はつきものです。けれども、不運だったとして

も、このような場合にはやり直しもきき、不運を運に変換させることもできましょう。なぜなら、不運を予見し、首尾よくやりとげること人間能力のうちに含まれているのですから。

しかし、もうひとつの人間の作品たる社会制度は、固有の重力をもっています。この制度は、人間がみずからの能力を発揮して、首尾よく初期の目的を達成するのを妨げます。

運・不運ということばは、こういうおきてにふれる、このなかで顕著に姿をあらわします。

ふれる？ 触れる。さわる。当たる。感じる。かかわる。そむく。ふれ歩く。

とにかく、さまざまな拡がりをもっているのが「ふれる」ですが、あのコトワザ、「子は夫婦のカスガイ」も、運や不運やおきてにふれたことを暗示してはいないでしょうか。

もっと具体的にいきましょう。

「子は夫婦のカスガイ」というコトワザは、「子」が申

したことばとは考えられません。また「夫婦」が自己主張や自己確認のイミでそういったとはいえません。もし、自己確認や自己主張の文脈で語ったのなら、かならず感嘆文の形をとるはずで、「やっぱり、子は夫婦のカスガイだなあ！」という思い入れがあるはずです。しかるに、それが無い。

してみると、「子は夫婦のカスガイ」はだれがいったのでしょうか。

上の者が下々の者に「夫婦」のオキテとして語り、そうあるよう命じた、とも考えられます。また、そのコトワザは「セケン（世間）」がそういつている、とも考えられます。この場合の「セケン」は輪郭があいまいです。けれども確実にその存在が伝わってくる。少しでもそのルールにふれると、ただちに非難が戻ってくる。

「子は夫婦のカスガイ」は、そういう「セケン」に対して「子」をかばう「夫婦」の態度表明ともとれます。

また逆に、「セケン」が「夫婦」を監視すべく設けた監視の窓のようにも見えてきます。

カスガイ再考

以上のように見えてくると、「カスガイ」という比喩は、意外に巧みな比喩であることがわかってきます。それは、社会が沈澱し、落ちついた段階の平衡状態を示しているように見えます。「子」や「夫婦」ならずとも、「AはBとCとのカスガイ」というように一般化することもできますから。「AはBとCとのバインド」「AはBとCとのポンド」といってもそう大して外れているとはいえないでしょう。

「AはBとCとのカンスキ」「AはBとCとの取りもち」「AはBとCとの仲立ち」。

時間の流れのなかでは勝を占めた安定性も、尊敬と規則の地位を維持できず、激しい感情の爆発と狂乱が生まれます。上下の転倒、左右の入れかえ、前後の取りかえが生まれたりします。こういうときには「カスガイ」は、重苦しいもの、わずらわしいもの、のように見えてくるはずで

「カスガイ」が、愛くるしいもの、無邪気なはたらきをする存在ものに見えるのは、あの爆発と狂乱が鎮静したあとです。ありふれたものが新鮮に見えるとき。「カスガイ」は単なる比喩ではなくなり、人間が過去現在未来を通じて、さまざまな手さぐりをくりかえしながら今日にいたったことが見えてくるとき。

一年の疲れが、一日の疲れが、ふっと消えるようなユ一モアを「カスガイ」を鏡として読みとったとき。

コトワザは、言葉、事業、異業等ことわざを呼び寄せ、「子」はその名を呼ばれ、「夫婦」もたがいの名を呼び合うでしょう。これが生きた実存なのです。

してみると、あの短かいセリフ、「子は夫婦のカスガイ」をどのように解し、どのように演じるか、にはかなりの余地の選択が許されているわけです、それはまた「カスガイ」がどう応答するか、という次のセリフや演技の面白さを読みとることに通じています。

(名古屋大学)